

K-524

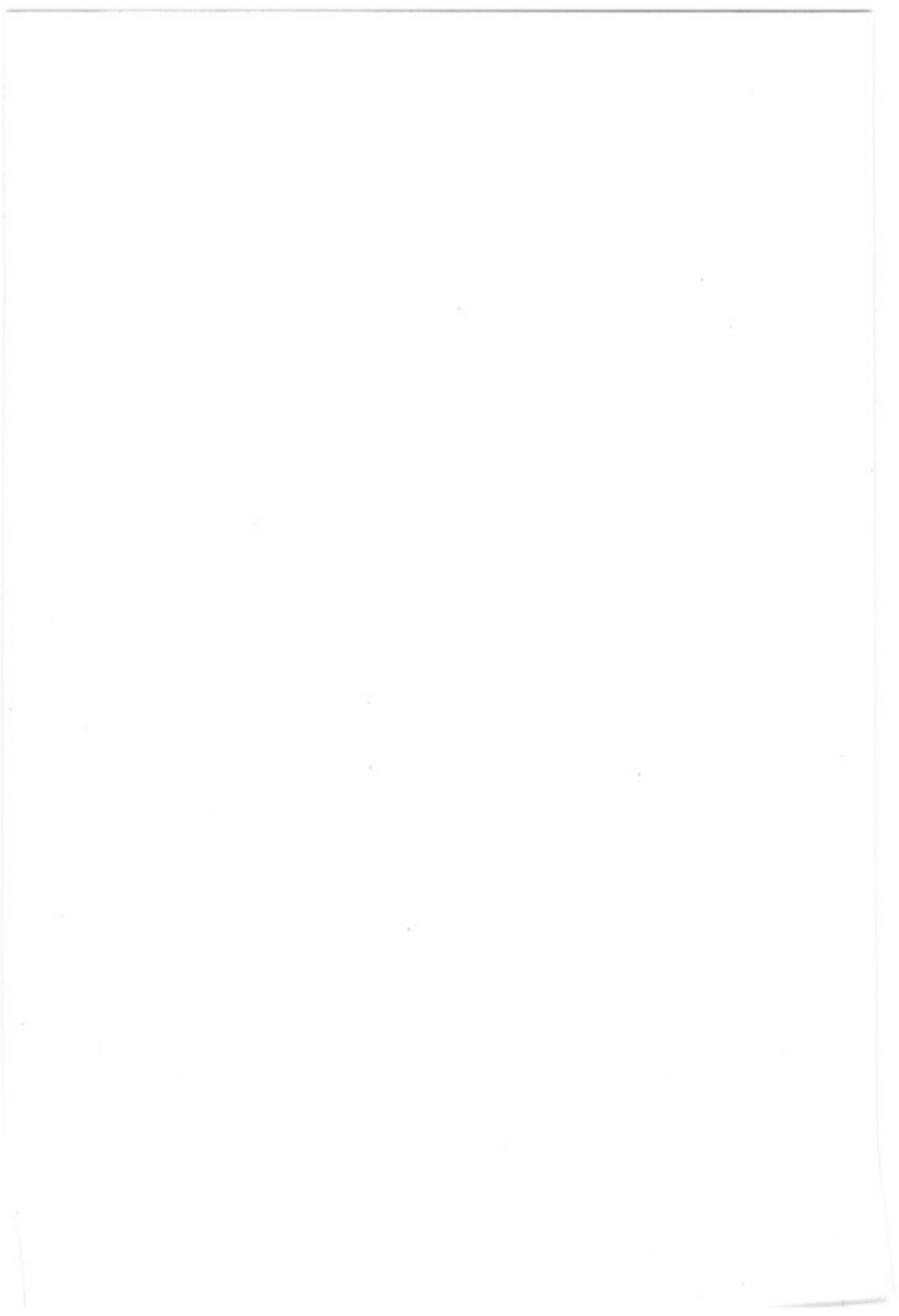
米沢市埋蔵文化財調査報告書 第27集

# 遺跡詳細分布調査報告書 第3集

住宅開発関係の分布調査  
大浦C 遺跡の調査  
寶領塚古墳の調査  
一ノ坂遺跡の調査

平成2年3月

米沢市教育委員会





## 序 文

この報告書は、平成元年度に文化庁の補助を受け、住宅開発等に伴う遺跡の詳細分布調査を実施した報告書です。

この調査は、昭和62年度から実施しており、今年で3年目となります。開発関係各位の深いご理解とご協力をいただき、遺跡の解明が着々と進展しております。

今年度の調査では、例年になく大規模なものが多く、全国に誇れる成果が得られました。

まず、賓領塚古墳の調査では、県内では最古の、東北でも最大規模の3段構築を有する前方後方墳であることが確認されました。また、一ノ坂遺跡については、国内でこれまで発見された中では最長の大型住居跡が1棟確認され、しかも極めて多量の遺物が出土するなど、全国の注目を集めました。さらに、大浦遺跡群については、以前から官衙跡の存在が予想されていましたが、今年度の調査で、奈良時代の官衙の一部とみられる造構が確認され、貴重な漆紙文書も出土しております。

このように、今年度の調査結果は、私たちの住む米沢市が、伊達・上杉統治時代の以前から地域の要衝として重要な役割を果たしていたことを教えてくれるものでした。

このような成果により、平成2年度から一ノ坂及び大浦の遺跡の調査に対し国の援助をいただくこととなり、今後さらに調査を進め、その全容の解明がなされることを大いに期待するものであります。

今後も、埋蔵文化財の保護保存につきましては、開発関係者と調整を図りながら調査活動を積極的に進めるとともに、先人の所産である文化財の愛護精神の啓発に努めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本調査にあたり格別の御指導、御協力を賜りました文化庁、山形県教育庁文化課、賓領塚古墳史跡保存会、さらに山田誠次郎氏、赤木伊勢吉氏、遠藤庄四郎氏をはじめとする地権者各位、地元の皆様に対し心から御礼申し上げます。

平成2年3月20日

米沢市教育委員会

教育長 小 口 亘



## 例　　言

1 本報告書は文化庁の国庫補助を受けて実施した平成元年度の埋蔵文化財分布調査事業の調査報告書第3集である。

2 調査は米沢市教育委員会が実施したものである。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体	米沢市教育委員会						
調査総括	二宮幸雄						
調査担当	手塚 孝						
調査主任	菊地政信 金子正廣						
調査補助員	原 三郎 小林理香						
作業員	皆川清助	中島国雄	遠藤昭一	藤守伊知郎	八巻慶一	八巻 久	
	勝見文男	堤 吉郎	柳町昌孝	井田重市	佐藤峯雄	我妻二雄	
	水野 哲	佐藤栄作	出口孝藏	佐々栄一	八巻八郎右エ門		
	後藤英雄	須藤重男	八巻 隆	秋保博之	綱川信一	大木和人	
	熊谷正俊	井戸和雄	藤井岳志	上村和也	宮越崇光	中村幸男	佐藤由美子
事務局長	梅津幸保						
事務局員	小林伸一 山田 隆 山口恵美子						
調査指導	文化庁 山形県文化課 山形県立博物館（加藤 稔・尾形與典）						
調査協力	遠藤庄四郎	山田誠次郎	赤木伊勢吉	遠藤栄吉	尾形宮重		
	後藤正則	高野創平	鶴巻 哲	八巻 隆	小池一志	庄田地区寶領塚古墳史跡保存会	（敬称略）
	米沢住宅産業㈱ 青森県埋蔵文化財調査センター						

4 掲図の縮尺は、各図面にスケールで示した。

5 各遺跡より出土した遺物は整理し、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

6 本書の作成は、手塚 孝、菊地政信、金子正廣が中心となり、第1節I・IIを金子、同IIIと第4節を菊地、第2節、第3節を手塚が主に担当したが、全体的には手塚が総括した。編集は手塚、小林伸一、責任校正は小林、山田がその責務に当った。



## 本 文 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
第1節 平成元年度 住宅開発等に伴なう埋蔵文化財調査経過	1
I 住宅開発等に係わる遺跡の確認	1
II 宅地開発による遺跡確認の実施概要	2
III 宅地開発等予定地内の調査概要	7
第2節 賀領塚古墳	8
I 遺跡の概要	8
II 調査の経過	8
III 調査の結果	10
1) 墳丘	10
2) 周溝	10
3) 莢石	10
IV まとめ	12
第3節 大浦C遺跡（大浦遺跡群第III次調査）	13
I 遺跡の概要	13
II 調査の経過	13
III 検出された遺構	13
○溝状遺構	13
○土壠	17
○柱穴	17
○ピット	17
○流し場跡	17
IV 検出された遺物	17
V まとめ	17
第4節 一ノ坂遺跡	18
I 遺跡の概要	18
II 調査の経過	18
III 検出された遺構	20
1. 第I次調査	20
1) 大型竪穴住居跡	20
2) 溝状遺構	22
3) 集石遺構	22
IV 検出された遺物	22

V	要約	25
	〈参考文献〉	26

### 插 図 目 次

第1図	米沢城跡の地形図	2
第2図	米沢城跡	3
第3図	米沢城跡（松ヶ岬神社境内）試掘調査平面図	3
第4図	大榎遺跡地形図	4
第5図	大浦B遺跡地形図	4
第6図	落合a遺跡地形図	5
第7図	一ノ坂遺跡地形図	5
第8図	金ヶ崎a遺跡地形図	5
第9図	大浦A遺跡地形図	5
第10図	住宅開発関係の遺跡分布図	6
第11図	寶領塚古墳測量図	9
第12図	寶領塚古墳トレンチ配図	11
第13図	大浦遺跡群の遺跡分布調査範囲図	14
第14図	大浦C遺跡（第III次調査）遺構全体図	15
第15図	一ノ坂遺跡全体図	19
第16図	一ノ坂遺跡グリット配図	21
第17図	一ノ坂遺跡大型住居跡（H Y I）平面図	23

### 付 表 目 次

第1表	宅地造成、宅地開発予定地内遺跡分布表	7
第2表	東北地方の前方後方墳一覧表	12

### 図 版 目 次

第一図版	寶領塚古墳の発掘（一）
第二図版	寶領塚古墳の発掘（二）
第三図版	寶領塚古墳の発掘（三）
第四図版	大浦C遺跡の発掘
第五図版	大浦C遺跡出土の陶磁器
第六図版	一ノ坂遺跡の発掘
第七図版	一ノ坂遺跡出土の土器
第八図版	一ノ坂遺跡出土の石器（一）
第九図版	一ノ坂遺跡出土の石器（二）
第十図版	一ノ坂遺跡出土の石器（三）

## 第1節 平成元年度 住宅開発等に伴なう埋蔵文化財調査経過

### I 住宅開発等に係わる遺跡の確認

平成元年度の住宅開発等に伴なう埋蔵文化財分布調査事業は、昭和62年度から始まり、3年目に入った。今年度も例年通り文化庁の補助を得て実施した。

今年度本市教育委員会に届け出られた遺跡に係わると思われるもので、現地確認・試掘等を実施したのは、下記の表のように全部で21件（平成2年3月現在）に達する。

その内訳として、従来と同じく圧倒的に住宅開発（住宅の新築、増改築、宅地造成など）に伴なうものが多く、次いで砂利採取と市道建設に伴なうものが多い。とくに例年になかったものとしては、米沢営林署関係の「造林事業」に係わるもの1件と、県の治山事業に係わる防災工事（雪崩防止柵工事）が1件あったことである。

住宅開発は、主に個人住宅の新・増改築が多く、しかも米沢城跡近辺の開発が10件占めている。詳細は後述するが、全体の印象としては、明治初期の藩籍奉還以後、全部とはいわないが、二の丸周辺まで民地として割譲されたらしく、約120年の間に堀は埋め立てられ、旧米沢藩政時代の遺構は目下のところ明確には残っていない現状である。さらに、大正6年と8年の米沢大火も、藩政時代の遺構を失う原因となったことも考えられる。次にこれは住宅開発に伴なうものではないが、本市「ふるさと創生事業」の一環として米沢城本丸水堀の浚渫と石垣の積み替え工事があり、その工事中舟の櫓が発見され、さらに両端を尖らせた長さおよそ130～150cmの杭状のものが出土したことから、「乱杭」と判断され、堀北側に3ヶ所のトレンチを入れた。その結果は、上杉氏入部期の米沢城本丸築造に係わるものと推測されている。

ともかく、実際に試掘・ボーリング探査などを実施した件数は、昨年と同様であるが、今後も住宅開発件数は増加するものと考えられ、それに対応できる条件整備が焦眉の急である。

#### 〈平成元年度 住宅等開発に係わる届け出件数〉

建築申請に係わるもの	14件
砂利（碎石）採取等に係わるもの	3件
営林事業に係わるもの	1件
防災工事事業に係わるもの	1件
道路建設事業に係わるもの	2件
合 計	21件

## II 宅地開発による遺跡確認の実施概要

宅地開発に係わる遺跡で教育委員会に届け出があったのは、前述の通り14件であるが、実際に試掘を行なったのは8件であり、その他はポーリング探査である。以下その概要を述べる。

### 1) 米沢城跡（第1図）

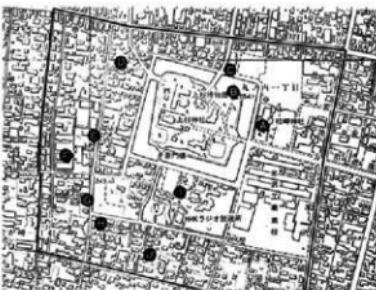
第1図のように、米沢城跡関連の開発は10件を数える。そのうち試掘を行なったのは、

A, B, C, F, I の5件、ポーリングが残りの5件である。Aについては、後述するとして、Bから述べることとする。

Bは、前述のごとく本市の事業の一環として、本丸石垣の積み直しと渋濠工事に伴なうものであるが、調査の結果、乱杭と焼き物（12点、灯明皿など17C初頭）、そして土壘下には犬走りが認められ、上杉氏の米沢城改修・整備を知る上で貴重なものであることが判明した。

Cはこれも「ふるさと創生」事業に係わるもので、現レストハウス前に、観光駐車場と公衆トイレを建設するものである。試掘の結果、中・近世の遺物が出土したので、開発担当課に要発掘の通知をした。Fは、旧織物工場跡地であり、ここに別な事業者の事務所を建設することから、トレチ掘りによる試掘を行なった。トレチは東西に2m×32mのものを南北に4本入れたが、試掘の結果、一部に藩政期の遺構は出土したもの、大半は後世擾乱されており、本格調査に至るような遺構は確認できず、慎重に工事をするように指示した。Iは、これも「ふるさと創生」事業に係わるもので、旧上杉隆憲邸を買上げ、「座の文化」館として市民に開放しようとするものである。試掘の結果、遺構・遺物は確認されず、工事進行を許可した。

残りのD, E, G, H, Jについては、個人の住宅の新築・増築による申請であり、Dは調査の結果、慎重工事、Eは事務所建設であるが、面積が狭隘なことと、土を掘っての建設ではないので、開発を許可した。Gは、住宅の増築であるが、ポーリング探査の結果、旧堀跡と認められ、かつ申請面積も狭隘なことから開発を許可した。Hは前年度隣接した住宅（南雲氏宅）の新築の際にも確認していた場所と同様であり、旧二の丸堀跡と認定されるため、開発を許可したものである。最後のJであるが、新築申請に係わるものであり、一部に二の丸堀跡が認められたが、土中は擾乱されているため遺物は出土しなかった。慎重な工事をするように指示した。



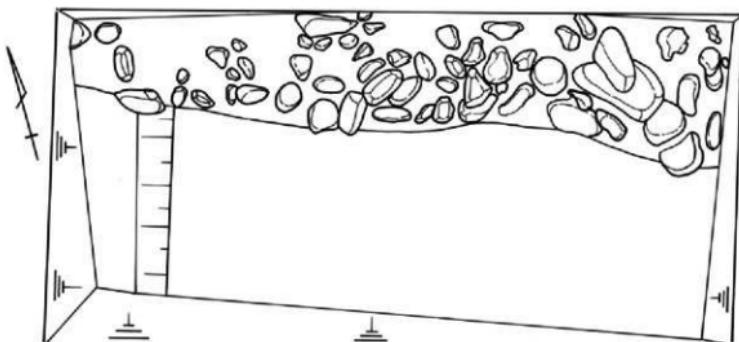
第1図 米沢城跡の地形図

### 2) 米沢城跡（第1図、第2図）

これは前述のAに当る場所である。これは松ヶ岬神社境内に、神社札授与所の建設に係るものである。建設予定地に  $2\text{m} \times 4\text{m}$  のトレンチを設定。5月25、26日の2日間をかけて確認したものである。現地表からおよそ1 m（第8層）までは、整地層であり、それ以下は、ボーリング探査で行なった。それによると遺構面に達する前層の第11層には焼土がみられたが、これは恐らく大正8年の大火による痕跡と思われる。試掘面積が前述のごとく  $2\text{m} \times 4\text{m}$  のトレンチであるため、全体的な様子は不明だが、慎重な工事を指示した。



第2図 米沢城跡



第3図 米沢城跡(松ヶ岬神社境内)試掘調査平面図

### 3) 大檀遺跡（第4図）

これは、本市建設部土木課による市道建設に伴なうものである。本市を取り巻く環状線の一つとして計画されたもので、最近この南原地区の開発は一段と進み、県立高校の移転、工場の立地、住宅団地の造成など、著しく変貌している地区である。このため、都市計画路線の一環としてこの道路建設設計画が持ち上がった。この付近は、昭和62年の試掘（分布）調査によって、縄文中期の遺跡が確認されていることから、今回の試掘となったものである。調査は、予定道路幅の範囲を8ヶ所坪掘りしたが、結果として遺跡の中心部には当らず、遺物の散布地であるため、開発を

すすめても良いとした。但し工事は慎重に行なうこととし、遺物・遺構が発見された場合は速やかに当教育委員会に届け出るよう指示した。

#### 4) 大浦B遺跡（第5図）

大浦遺跡はA～Dまで4つの遺跡群に分かれ、米沢市中田町に所在する。縄文時代と奈良・平安期の遺物が出土することから、この時期の集落跡があると考えられていた。その後、昭和59年に大浦C遺跡の一部約1600m<sup>2</sup>の発掘が行なわれて、布目瓦2点、木筒1点を検出し、時期も8世紀中葉から末葉の頃と推定された。とくに布目瓦と木筒の出土は、付近に官衙跡の存在が予想された。さらに昭和60年には大浦A遺跡の一部が発掘された。調査面積約1000m<sup>2</sup>、主な出土遺物は、墨書き器があり、遺構としては井戸跡、掘立建物跡など

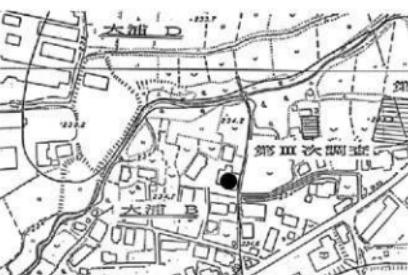
がみつかり、前述の大浦C遺跡同様8世紀～9世紀近くの遺跡であることが判明している。今回は大浦Bと大浦Cとの境い目近くの個人住宅の新築に伴なうものであり、現地確認の結果、現状は窪地となっている。今回の申請内容はその窪地を整地した上に新しく建物を建造する計画であったため、それ以前の遺構は確認されなかった。従って工事による遺跡への影響はないものと考えられ、開発を許可した。ちなみに、この大浦B遺跡南では、今年度の発掘調査により、明らかに官衙跡と考えられる遺構が検出された。今回は官衙の一部であり、数ヶ年かけて調査を続行する予定である。

#### 5) 落合a遺跡（第6図）

ここは、本市広幡町上小菅に所在し、縄文の石器片などが採取されることから登録された遺跡であるが、今回その一部の舌状台地を取り崩して、砂利の採取をする計画が本市生活環境課より提出され、現地確認を行ったものである。関係者立ち会いのもと一部試掘を試みたが、遺構の存



第4図 大浦遺跡地形図



第5図 大浦B遺跡地形図

在は確認されず、開発は可とした。但し砂利採取工事の中で、台地をカッティングした段階で再度現場を見せて欲しい旨伝えた。

#### 6) 一ノ坂遺跡（第7図）

今年度の発掘調査により、縄文前期のロングハウスが検出された遺跡の範囲内に、今回の試掘地がある。これは保育園の園舎増築に伴なうもので、その建設される予定地に、 $3\text{m} \times 3\text{m}$ の試掘坑を設定し、重機によって表土剥離を行なった。地表から1mまでは、拳大の石が混入しており、それ以後手作業によって掘り下げた所、人骨二体分が出土したため作業を中止した。関係者によると元は墓地であった所とのことで、遺跡範囲外とし開発を許可した。

#### 7) 金ヶ崎 a の遺跡（第8図）

これは昨年度ホテル建設に伴なう件で慎重工事をするよう指示した箇所のさらに東側に位置する。ここに建築資材を置く建物を建設しようという計画から試掘を実施した。試掘面積は $130\text{m}^2$ 、元は畑地であった所である。すでに表土は剥かれており、遺構掘り下げと面整理を中心に行なったが、遺物としては中世期のものと思われる鏡の破片1点のみで、他に遺構は認められなかった。遺跡の中心はもう少し東側に存在するものと考えられる。

#### 8) 大浦 A 遺跡（第9図）

これはレンタルビデオ社屋建設に伴なうもので、試掘の結果、西側は一部攪乱されているが、遺構確認面は約1mと深く、遺構の残存状況は良好であり、本調査の必要ありとした。



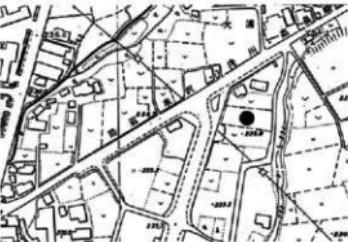
第6図 落合a遺跡地形図



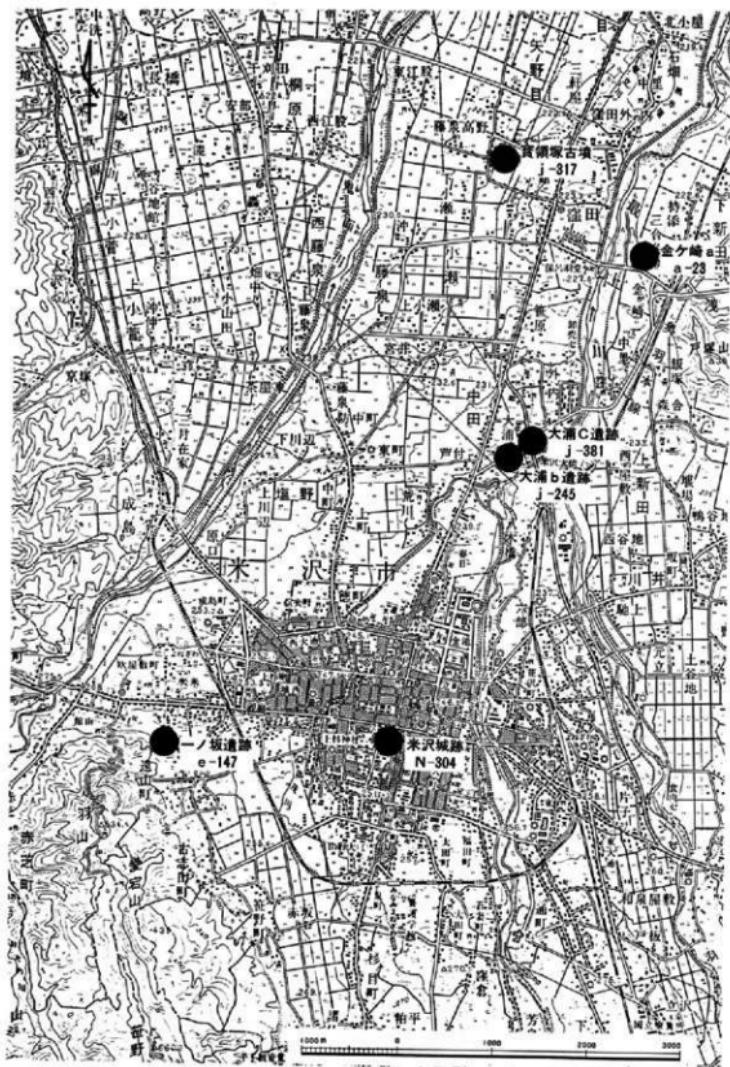
第7図 一ノ坂遺跡地形図



第8図 金ヶ崎a遺跡地形図



第9図 大浦A遺跡地形図



第10図 住宅開発関係の遺跡分布図

### III 宅地開発等予定地内の調査概要

平成元年度（1989）に発掘調査を実施した遺跡群は第1表に示す遺跡群である。位置については第10図を参照願いたい。寶領塚古墳、大浦C遺跡、一ノ坂遺跡、大浦B遺跡について述べる。

寶領塚古墳は宅地開発予定地内における確認調査として実施したものである。古墳が位置する南方一体は国道13号線の四車線敷地として決定しており、完成後は過去の状況から察してこの一帯は住宅造成地として利用されることはあるであろう。この周辺は水田で占められ、十数年前に圃場整備が行なわれた際に古墳の前方部が約三分の一削除された。

そのため今回の調査は古墳の全長を明確にすること、次に構築状況等を把握し年代的位置付けの事項に重点をおき、発掘調査を実施した。調査期間については作付前との条件から平成元年4月3日から同年4月24日までの日程であった。寶領塚古墳と併行して大浦C遺跡の発掘調査も開始され4月28日で大浦C遺跡も終了した。本遺跡は第13図で示すようにAからD地点に及ぶ広範囲な遺跡群であり、上記した発掘調査は第IV次調査にあたる。この発掘調査は遠藤庄四郎氏の新築工事に伴なうもので調査面積は約100m<sup>2</sup>であった。縄文・奈良・平安・中世・近世の複合遺跡である。今回の調査地点は中世・近世が主体で、奈良・平安期の遺構は検出されなかったが、遺物は少量認められた。ちなみに第I次調査では奈良時代、第II次調査は平安時代が主体である。

一ノ坂遺跡の調査期間は第I次調査が平成元年5月12日から同年6月30日、第II次調査が平成2年（1990）2月22日から同年3月3日である。第I次調査で検出された縄文前期初頭の大形竪穴住居跡は文化庁、県文化課の指導を受けた市教委が地主の理解と御協力を賜わり、住居跡及び付近の約550m<sup>2</sup>（166・7坪）を分筆していただき、平成元年10月25・26日に埋め戻した。

大浦B遺跡は平成元年11月6日から調査を開始し同年12月15日で積雪のため調査を中断し、調査区にはシートをかぶせて遺構の保存を図った。I次からIV次に亘る調査結果から今年度の調査区は官衙跡と考えられ、一ノ坂と同様に保存に向けて計画が検討されている。

第1表 宅地造成、宅地開発予定地内遺跡分布表

No.	遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	時期	開発予定内容
1	j-317	寶領塚古墳	窪田町窪田字北宝領863-1他	古墳	古墳（前期）	宅地造成
2	j-381	大浦C	中田町字大浦510他	集落跡	奈良・中世	宅地造成
3	e-147	一ノ坂	大字遼山町字反目	集落跡	縄文前期初頭	宅地造成
4	n-304	米沢城跡	丸の内一丁目上杉神社境内他	城館跡	中世・近世	宅地造成
5	j-245	大浦B	中田町字芦付290他	官衙	奈良・平安	店舗
6	a-23	金ヶ崎a	大字上新田字松原台2356他	集落跡	奈良・中世	宅地造成

( )は推定長を示す

## 第2節 賀領塚古墳

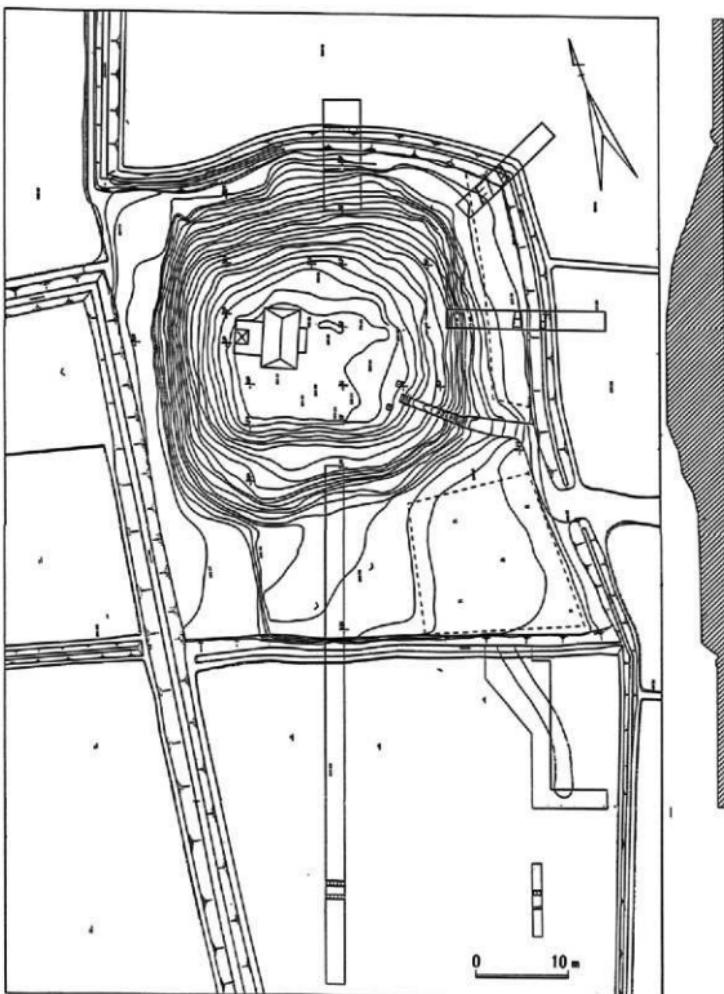
### I 遺跡の概要

本古墳は米沢市蘆田町蘆田字北賀領863-1他に所在する。付近一帯は水田地帯となっており、古墳の存在する部分だけが小高くなっている。以前は現在の賀領塚南方にも突き出す様に小塚が存在していたが、十数年前に圃場整備事業によって約三分の一が消滅したと言われる。この賀領塚は寶（宝）故に古くから何らかの埋蔵物が埋納しているのではないかと注目されてきた。事実、南側の塚（前方部）から鉄製の刀が出土したと言う話もあるが、真偽の程は不明である。墳丘には部落の鎮守となる賀領塚稻荷神社が祭られ、神社を守る様に百年は経過したと思われる杉の老木が線をたたえ、より一層の神秘さを与えている。本古墳が注目を集めたのは手塚らが中心となって米沢盆地の古代～中世の塚の研究を進めていた所、地元の石山忠美氏から蘆田地区に2基の大塚が存在し、もしかすれば古墳の可能性もあるのではないかとの情報であった。そこで賀領塚稻荷神社総代の八巻慶一、八巻八郎エ門、八巻久氏と石山忠美氏、それにまんぎり会の手塚孝、菊地政信らで字切図を元に検討した所、前方後方墳である可能性が極めて高いことから測量調査で明確にする必要があるとの認識に立った。賀領塚稻荷神社氏子一同と上蘆田下部落内で協議した結果、まんぎり会の協力で測量調査を実施することになった。昭和61年5月3日～同年5月5日に米沢市蘆田町上蘆田下部落が主体となって測量調査を行なっている。その結果、二段構築を有する前方後方墳で、少なくとも60m以上の規模をもつ古墳であることが判明した。またボーリング探査では内部に河原石が多数存在することも確認し、置賜盆地では初の葺石をもつ古墳の可能性も指摘された。その後、賀領塚古墳の重要性を鑑み、ふるさとの貴重な文化財を解明し、保存活用をはかり永久保存を行なう目的で賀領塚古墳史跡保存会が発足している。今回の調査も当保存会の要望である市指定を前提とした学術調査であり、古墳の規模や上部構造、周溝の有無それに失われた前方部を把握する目的で米沢市教育委員会が主体となって実施したものである。

### II 調査の経過

調査はトレチ法を主にし、失われた前方部を確認するために2m×56mのAトレチを初め、2m×14mのFトレチ、1m×8mのIトレチ、2m×8mのHトレチの4本を設定する一方、後方部を確認するため東に2m×17mのBトレチ、北に2m×12mのCトレチ、西に2m×6mのDトレチ、さらにコーナー部を確認するための北東部隅に2m×13mのGトレチと古墳のくびれ部を確認するためのEトレチの5本、計9トレチを設定し、調査を実施した。この中でCトレチは葺石が明瞭に確認されたことから4mに拡張し、同じく前方部のFトレチも周溝の方向から変則的に拡張をした。発掘調査は概ね前方部を4月3日～4月13日、後

方部を4月14日～4月21日に掘り下げる終了し、4月22日以降は写真撮影、セクション図、平面図作成を4月24日、4月25日からは埋め戻しを行い、4月28日で終了した。



第11図 実領塚古墳測量図

### III 調査の結果

これまでの2段構築とされてきた寶領塚古墳が、今回の発掘調査によって3段構築を呈する前方後方墳であることが判明した。主軸長もAトレンチで検出された周溝により80mを有する東北最大規模の前方後方墳となった。ただ後方部の西側が圓場整備等において、著しく削平しているため後方部幅が確認するまでには至らなかった。以下簡単に今回の調査で確認された成果について述べてみる。

#### 1) 墳丘

前方部の三分の二が圓場整備によって失なわれ、後方部も西側から北西部にかけて削平と水路によって破壊されているので全体的な墳丘の計測値は明確にできないが、現存する墳丘とB, C, Gトレンチの調査から判断し、確認できなかった西側を3段目の状況から推測できる主軸線に沿って反転すれば、3段構築を有する後方部は、3段目が南北24m、東西(22m)、2段目が南北32m、東西(32m)、1段目が南北40m、東西(44m)と算定できる。

後方部の高さは3段目で4.8m、2段目が3m、1段目が1.5mを有する。前方部も同様にA, F, Iのトレンチで検出された周溝から前方部幅を推測すれば50mとなる。主軸長は80mを計り古墳の後方部を6とした比率を用いれば寶領塚古墳は6:6型の前方後方墳となり、要約すれば下記の様になる。

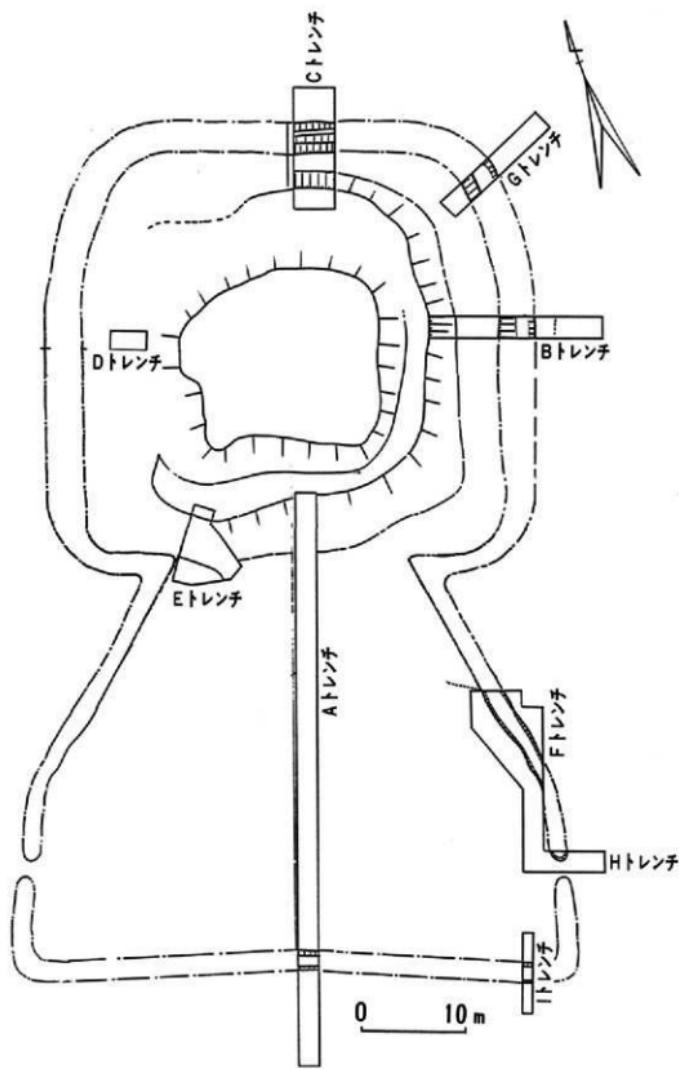
全長	前方部長	前方部幅	後方部長	後方部幅	後方部高	比率
80m	40m	(50m)	40m	(44m)	4.8m	6:6

#### 2) 周溝

A, B, C, F, G, H, Iのトレンチで確認された。古墳の墳丘に沿って全周するものとみられ、前方部は幅1.4m~2.1m、深さ15cm~55cm、後方部が2.9m~3m、深さ45cm~62cmと前方部よりも後方部が幅広の特徴がある。何れも周溝内部には底面から浮いた状況で大量の川原石が集石しており、墳丘上の葺石が落下して堆積したものと考えられる。遺物としてはFトレンチ内から土器器片1点が検出されたのみであった。

#### 3) 補石

後方部に設定したB, C, E, Gの各トレンチ内で確認された。後方部の1段目・2段目斜面に沿って検出されたもので、B, E, Gトレンチは畠の開墾の際に抜き取られたらしく、1段目の平坦面には葺石は存在しない。ただし、Cトレンチの状況から想定すれば、墳丘全体に配されていたものと判断される。葺石は選定された拳大の川原石を使用しており、黒褐色系泥岩が多量に存在することから鬼面川流域の石材を運搬したものと考えられる。県内で葺石の痕跡が認められた古墳としては上ノ山市土矢倉古墳、米沢市八幡塚古墳の二例が存在するが、明確に検出され



第12図 実領塚古墳トレンチ配図

たのは寶領塚古墳が唯一である。

#### IVまとめ

今回のトレンチ調査で寶領塚古墳の全長が80mを有する3段築造の前方後方墳であることが判明した。調査以前は2段構築を有する方墳とみる研究者も少なくなかった。これまでに東北地方からは18基の前方後方墳が確認されており、福島県原町市大字上浜佐の桜井古墳（全長75m）、山形県川西町上小松の天神森古墳（全長75.58m）の両者が現在までの最大の古墳であった。

寶領塚古墳はそれらを5mほど上回る東北最大規模となった。また、葺石の存在や古墳の前方部と後方部の比率が6:6型と同比率を有するものは古いとされていただけに川西町天神森古墳（6:4.5型）に先行する古墳、即ち現在発見されている県内最古の大型古墳と言えよう。

また同じ窪田地区に存在する八幡塚古墳は昭和63年に確認調査を実施しているが、5世紀前半の2段構築を有する特異な円墳（全長27.6m）であることが分かっており、それらとの関係や天神森古墳、南陽市稻荷森古墳、米沢市戸塚山139号墳等を含めた米沢盆地全体における古墳文化の発生や発展に重要な影響を与えた古墳であることは間違いない。

東北地方の前方後方墳一覧表

No	古墳名	所在地	全長	後方部長	後方部幅	前方部長	前方部幅
1	寶領塚	米沢市窪田町字北寶領	80	40	(44)	40	(50)
2	桜井	原町市大字上浜佐	75	40	47	35	27
3	天神森	川西町上小松	75.58(72)	43.08(44)	51.05(48)	32.5(28)	32
4	宮山	名取市飯野坂	70	35			25
5	薦師堂	名取市飯野坂	68	35			21
6	觀音塚	名取市飯野坂	63	30			23
7	京鐵塚	遠田郡小牛田町荒山	61~65	33~34			20~24
8	山居	名取市飯野坂	60	30			30
9	石ノ梅	玉造郡鳴子町大口	60?	30?			
10	鎮守森	河沼郡会津坂下町大字青津	55.2	27.2	30.1	28	15.6
11	高鎧山	名取市高鎧	53~56	27			15~16
12	鴻ノ巣3号	名取市箕輪	45?				
13	山居北	名取市飯野坂	42	20			12
14	長井戸	亘理町長瀬字長井戸	40				
15	本屋敷1号	双葉郡浪江町大字北幾世橋	36.5	22.5	17.6	14	(13.4)
16	出崎山2号	河沼郡会津坂下町大字大上	33	21.5	17	11.5	10.3
17	経塚山6号	南陽市宮内	30	20			
18	出崎山1号	河沼郡会津坂下町大字大上	25	17	15	8	8.5
19	十九塚3号	耶麻郡塙川大字金橋	23.8	12	14.7		9

( )は推定長を示めす

### 第3節 大浦C遺跡（大浦遺跡群第III次調査）

#### I 遺跡の概要

本遺跡は第13図で示す様に大浦A, B, C, Dの四地域に分けられる。遺跡群が分布する箇所の標高は西方で236m, 東方で233m, 河川との比高差は6mを有す。地形地域区分では低地に分類され南方の最上川(松川), 西方の鬼面川(現在の堀立川)沿岸低地に位置する自然堤防であり、遺跡周辺は谷底平野、氾濫原が取り囲む。自然堤防は第四紀現世沖積層で砂、シルト、深部は砂礫から成る。大浦遺跡群は約30万m<sup>2</sup>を有す範囲と考えられ、複合遺跡であることが第I・II次の調査結果から明らかになっている。(米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集「大浦」1887年米沢市教育委員会発行)参照。

#### II 調査の経過

昭和59年(1984)に第I次調査を実施した際、西側にも遺跡の範囲が延びていることが確認されており、地権者である遠藤庄四郎氏も承知の事であった。この度、新築工事を着工するにあたり、数度、本市教育委員会に足を運んでいただき、発掘調査日程等の打合せを行なった。これを受けて平成元年(1989)4月3日より調査を開始した。

調査は現況が宅地・畑であることから、すぐに開始される畠からとしA区と定めた。範囲は6×9mである。次いで現存の家を取り壊した後、敷地内で諸条件から発掘が可能な範囲を選びB区とした。A区の南を流れる水路を境とした南側をB区とした。8×8mさらにその西側に4×4mの範囲を設定した。A区は周囲の状況から重機による表土剥離は出来ず、すべて人力で調査を進め4月14日に平板測量を除き終了する。B区は敷地であり、版塗層が大半を占める状況であったので、遠藤氏の御厚意により、一部重機を使用した。これら両区とも当初の予想に反して検出された遺物、遺構は中世～近世に位置するのが判明するに至った。4月26日に現地説明会を開き4月28日すべて調査が終了した。

#### III 掘出された遺構〔第14図〕

AとB両区の調査範囲より、次の遺構が検出された。溝状遺構(KY)15基、土壙(DY)2基、柱穴(TY)161基、ピット(PY)46基、流し場跡2箇所であり、これらの遺構群はいずれも重複関係を呈し、年代的には中世～近世に位置付けられる。A区は流し場跡が主な遺構、B区は柱穴群が主体を占め、両区に跨る遺構として溝状遺構が認められた。列挙順に概要を述べる。

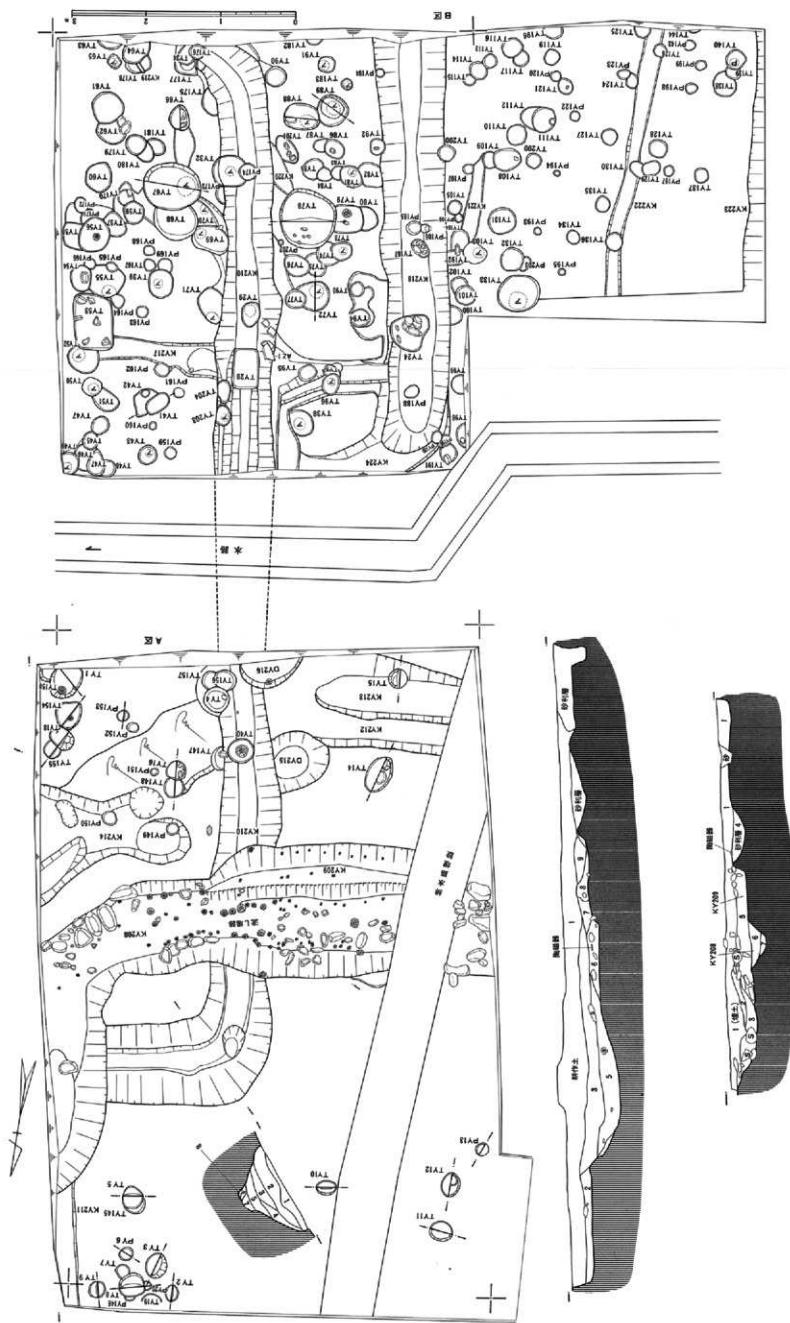
##### ○溝状遺構〔第14図 KY 208～214, 217～224〕

代表的な溝としてKY201がある。両調査区の東側に位置し南北に延び、南北のコーナー部が確認され東方に延びる。断面形態は「V」字形を呈す薬研場で北方コーナー部が最大幅で1.1m、南方は狭く65cmを有す。深さは平均で60cmあり、全長は13.8mを測る。

コーナー部が直角に曲がる形状であり、建物を区画する目的で構築された溝状遺構と想定され

第13図 大洲電鉄敷設の道路分布調査範囲図





第14図 大浦C遺跡(第III次調査)遺構全体図

年代は出土遺物の内耳取手土鍋から中世（14～16世紀）に位置すると考えたい。

○土壤　〔第14図　D Y 215, 216〕

D Y 215がK Y 210に切られる事から中世に位置する土壤であり、D Y 216はK Y 210を切り内部から陶磁器片や焼土が出土しており、近世のゴミステ穴であろう。D Y 215の性格は不明。

○柱穴　〔第14図　T Y を付けた番号〕

平面形状が円形及び橢円形を呈すのが最も多く、他に方形状も若干認められた。これらの中で「アカリ」が確認出来た柱穴には図面で「ア」と示した。またT Y 1, 40, 56, 79, 154には柱根が残存していた。調査範囲が小規模なことから建物を明確にするには至らなかったが、柱穴は粘土で柱の周りを固めたタイプ、礫を底面に置くタイプ、砂利を入れるタイプなどが認められ、年代の差によるものと理解したい。これらの柱穴群はB区に集中して認められた。ちなみにB区は遠藤氏の解体した宅地下で現存した家には宝暦年間（1751～1763）に新築したという記名があったと言う。又いい伝えによれば解体した家は以前B区西側にあり、台風によって倒壊したので現在の場所に移転したとの事である。これらの事から判断して今回検出されたB区の遺構は少なくとも宝暦年間以前の年代があたえられよう。

○ピット　〔第14図 P Y を付けた番号〕

平面形状が円形を呈す。柱穴と同様に関連性をみいだす事はできなかった。

○流し場跡　〔第14図 K Y 208, 209〕

耕作土を剥離した時点で第14図に示した礫群が確認された。この礫を取り除くと、多量の陶磁器類が埋没した箇所がその後の精査で流し場と判明した。重複関係からこの流し場は2回に亘って構築された痕跡を呈す。流し場の発掘例としては上浅川遺跡第III次調査が挙げられる。年代的には出土陶磁器類から天明元年（1781）以降の流し場跡と考えられる。

#### IV 検出された遺物　〔第5図版〕

A区流し場跡を中心に約300点出土し、陶磁器類が大半を占める。須恵器片2点、中世の遺物として内耳取手土鍋片がある。陶磁器類は近世に位置する。他に砥石31点、寛永通寶13枚が出土している。陶磁器類の種類は擂鉢、小皿、急須、徳利、茶碗、壺、斐、キツタテ等がある。

#### Vまとめ

I・II次の調査で確認された遺構遺物の中心は奈良・平安時代であった。それに対して今回の調査では中世・近世が主体をなす。中世に位置する薬研堀は伴出遺物から14世紀前後と想定され、館の周囲に巡らす方形館の出現を解明する資料を得たと言えよう。遠藤氏の西北にも堀で区画した平坦地が現存し「向屋敷」と呼ばれている。遺物としては成島焼・本郷焼が多く認められた。詳細については本報告書で述べたい。最後に御協力を賜った遠藤氏に深く感謝いたします。

#### 第4節 一ノ坂遺跡

##### I 遺跡の概要

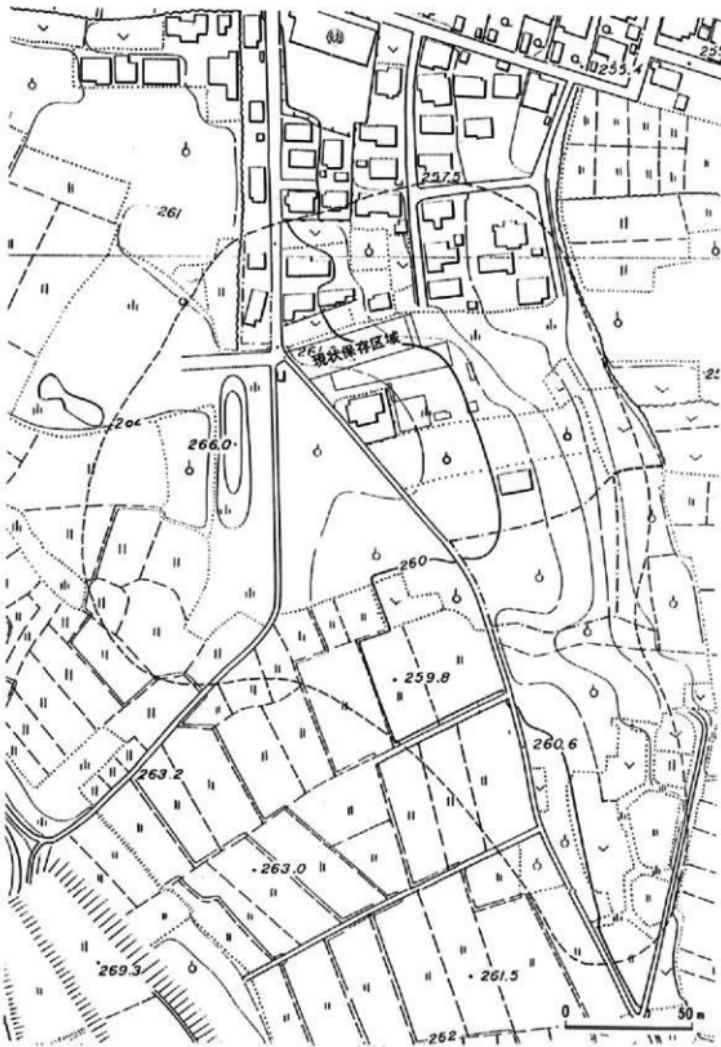
本遺跡は米沢市街地の西部、米沢市大字矢来一丁目1073-4番地他に所在する。遺跡周辺の地形は笠野山（斜平）丘陵の西端となる羽山山麓から東側に張り出したゆるやかな舌状微高台地で、標高259m～261mに位置している。この台地は洪積世の終わり頃に旧松川と旧鬼面川が複合形成された河岸段丘であり、北側は比較的ゆるやかな鬼面川河岸段丘、東側から南側にかけては急速に発達した松川河岸段丘として、遠山地区、南原の笹野、丹南地区と明瞭に確認される。沖積世に入ると旧松川は幾多の水路変更を重ね西へ移行する。遺跡はこの洪積世台地と直ぐ下に広がる沖積世台地を含めた東西220m、南北310mに分布する縄文前期初頭と15世紀代の中世期の複合遺跡である。この洪積世、沖積世（主に沖積世が多い）台地上には一ノ坂遺跡の他に生蓮寺、地蔵園、館山、宮ノ前、縁返遺跡など縄文前期、同中期を主体とした40数箇所の遺跡が密集する特異な地域でもある。

一ノ坂遺跡の発見は、戦前頃と言われる。その後、昭和37年頃から置賜考古学会員の小池一志と水野哲氏が分布調査や一部試掘を行なっている。その結果は石槍・石匙類を中心とした石器群を多量に発見しているものの土器類が検出されないこともあって、特別に注目されずに今日に至ったのである。

平成元年に入り本遺跡の中心部に宅地造成の申請が米沢市建設部建築課に提出されたのを受けて米沢市教育委員会が申請地一帯の試掘を実施した結果、多量の遺物が確認されたことから、関係者と協議をして発掘調査を実施することになったものである。

##### II 調査の経過

調査は宅地造成範囲と取り付け道路を含む約800m<sup>2</sup>を調査対象として平成元年5月12日～同年6月30日の予定で開始した。調査するのにあたり、河岸段丘と段丘の下部（沖積世台地）を区別するために段丘下をA～D、段丘上をE～Lと8×8m単位のグリッドを設定する。重機による表土剥離、面整理を5月12日、5月18日から精査を行なったところ多量の遺物が段丘の下部に沿って検出された。一方、段丘上は砂利層と礫層であることや表土が浅く後世の擾乱を著しく受けていることもあって明瞭な遺構は存在しなかった。従って遺構遺物が密集する段丘下部を主体に調査を進めることにした。5月23日からは第2層を撤去し、第3層上面で遺構の検出にあたった。遺構確認面が黒色土（黒ボク）であるために苦労を要したが、調査区の中央に沿って溝状の遺構が細長く東西に認められた。しかも遺構確認面からは剣片、チップ、炭化物が異常なほどに混入していることから竪穴住居跡が重複する可能性が高いとの判断で、慎重にプラン確認を5月31日まで行なった。だが遺構の切り合い関係は認められず大形溝状遺構としてA～Dグリッドにベル



第15図 一ノ坂遺跡全体図

トを残し、掘り下げた結果、予想外の大型竪穴住居跡であることが判明した。しかも住居跡は更に東に延びることから8m×10mの拡張区M区を新たに設定し、精査の段階で住居跡の南面（段丘直下に排水施設と推測される溝状遺構（KY2）も検出された。6月1日からは大型竪穴住居跡（HY1）の掘り下げを覆土（F<sup>1</sup>～F<sup>3</sup>）の順で進め、床面に近いF<sup>3</sup>層はポリ袋に採集し、水洗い用として450袋を収納した。6月20日からは住居跡の柱穴、炉跡、溝（KY2）、土壙等の確認、掘り下げ、セクション図作成、遺物の出土平面図、写真撮影、遺構平面図を順次平行して進め6月30日の現地説明会をもって終了した。

その後、文化庁、山形県教育庁文化課の指導で大型竪穴住居跡を保存する方向での指摘があった。教育委員会では地元の山田誠次郎氏、宅地造成元の赤木伊勢吉氏との協議の中で、山田、赤木両氏の全面的な御厚意で大型竪穴住居跡を含む南北12m、東西47mの約550m<sup>2</sup>を現状保存することになり、10月25日に山砂を搬入し埋め戻した。そこで赤木氏は保存区域を除く河岸段丘の南側に新たに宅地造成を計画変更したのを受けて、米沢市教育委員会で平成2年2月22日から同年3月3日の発掘調査を実施している。調査は宅地と坪庭、取り付け道路を対象に実施し、トレントを主体にA～Eの5箇所を配して進めた。今回は先の大型竪穴住居跡が発見された平成元年の5月12日～同6月30日の調査を第I次調査、後の平成2年2月22日～同年3月3日の調査を第II次調査と区分し、その概要を述べることにする。

### III 検出された遺構

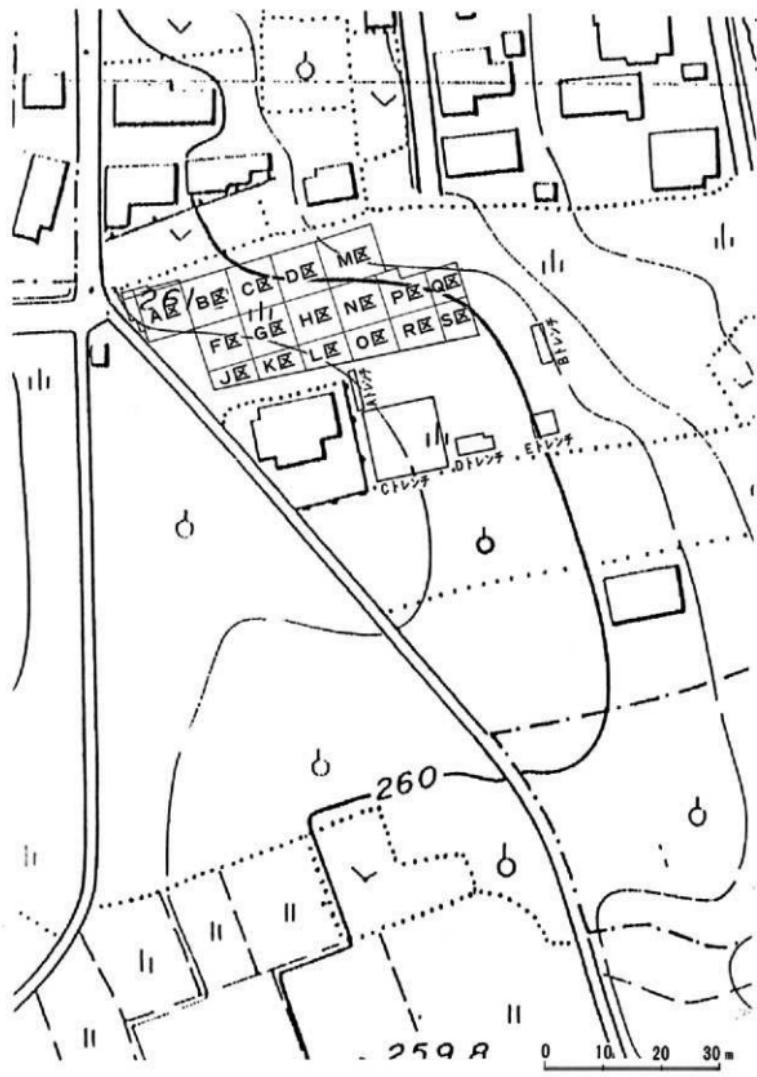
#### 1. 第I次調査

今回の第I次調査で検出された遺構は河岸段丘の下部に沿って認められた大型住居跡1棟と住居跡に伴う炉跡、土壙、溝状遺構、それに明治初期頃と推測される集石土壙5基、風倒木4基がある。ここでは大型住居跡を中心に説明を加える。

##### 1) 大型竪穴住居跡 [第17図]

A～D・M区にかけて確認された。ほぼ東西方向に主軸長を有する長大型竪穴住居跡であり、全長43.5mを計る。平面プランは両端が丸味を有する長楕円形をなし、僅かながら両端が北側に内曲気味を呈する特徴をもつ。住居跡の短径（幅）は両端のA区とM区付近が幅広く4m、B区付近が3.7m～3.9m、C区付近が3.4m～3.8m、D区付近で3.4m～3.6mと両端がやや広く、中央にかけて若干狭くなる特徴をなす。柱穴は壁柱穴を主体にはほぼ1m前後と比較的等間隔に配置されている。柱穴の大きさは15cm～30cm、深さ25cm～45cmを呈し、91本が存在する。

炉は中央部からやや北寄りに配され、西側からGY14、GY12、GY10、GY4、GY19、DY17の6ヶ所の地床炉が認められた。床面は黄褐色粘質シルト層3～7cmの貼り床を施しており、A区とB区のGY12、GY14を中心にして多量の炭化物が検出されている。遺物は床面上から



第16図 一ノ坂遺跡グリッド配図

貼り床面にかけて多量に検出されており、主に石器類は東側のM区・D区に集中し、土器類と炭化物はA～C区の西側に集中する特徴がみられた。壁は確認面で10cm～20cmであった。

### 2) 溝状遺構

大型竪穴住居跡の南側に沿って検出されたもので、幅60cm～95cm、深さ15cm～50cmを有している。層位は自然堆積状況を示し、溝の底面にかけて石器の剥片約300点が検出している。大型竪穴住居跡に接していることから推測すれば、住居跡に密接に係わりを有する排水施設の可能性が高い。

### 3) 集石遺構

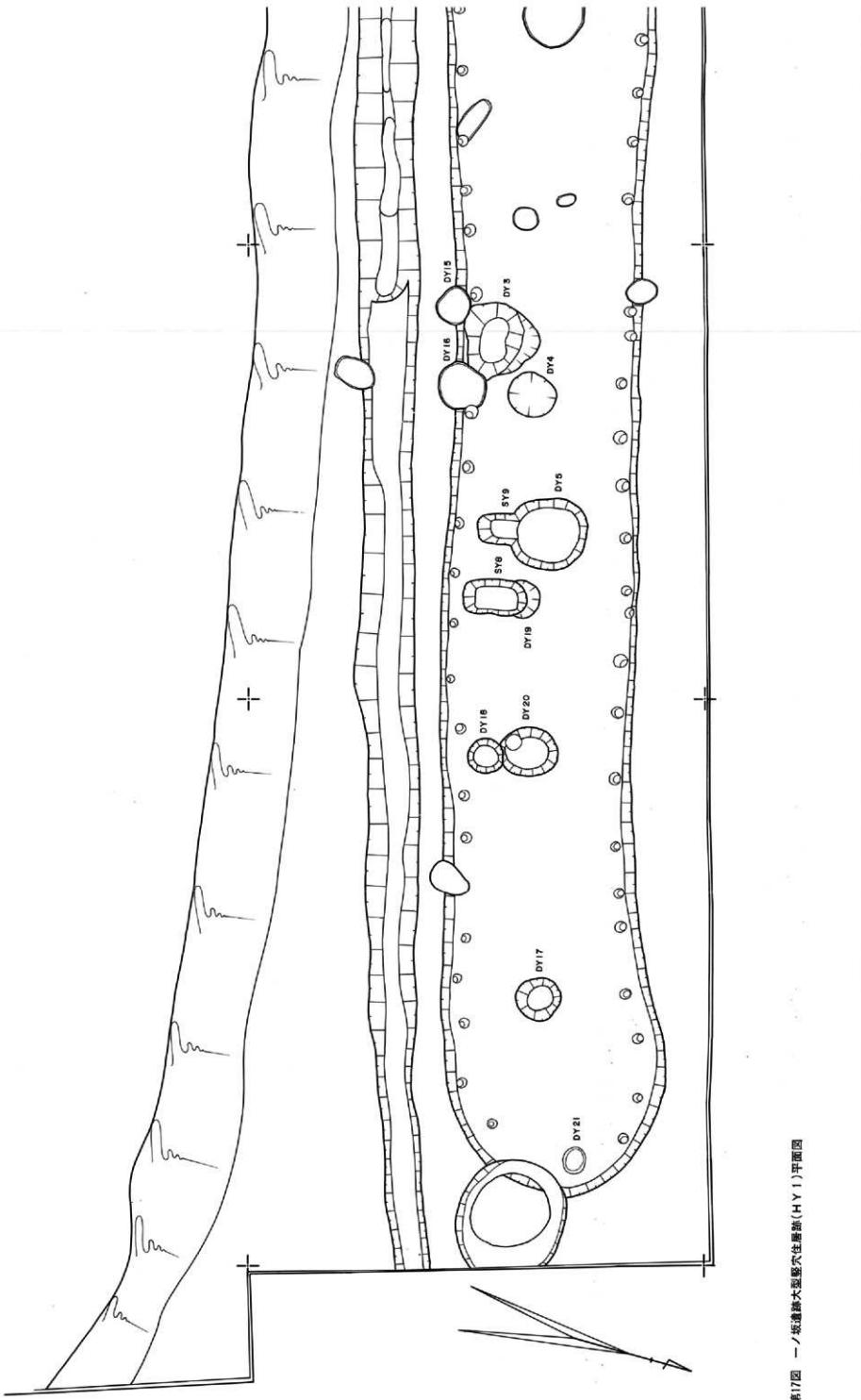
住居跡内のSY11、SY8、SY9の3基とKY2の溝内に位置するSY7、SY12の5基が存在する。何れも長方形や、方形プランを示すもので、小竪穴状の穴に川原石を詰めたものである。内部からは大型の獸骨（馬？）とともに成島焼や近世陶磁器の破片が検出されていることから想定すれば明治初期頃の遺構と考えられる。

## IV 検出された遺物

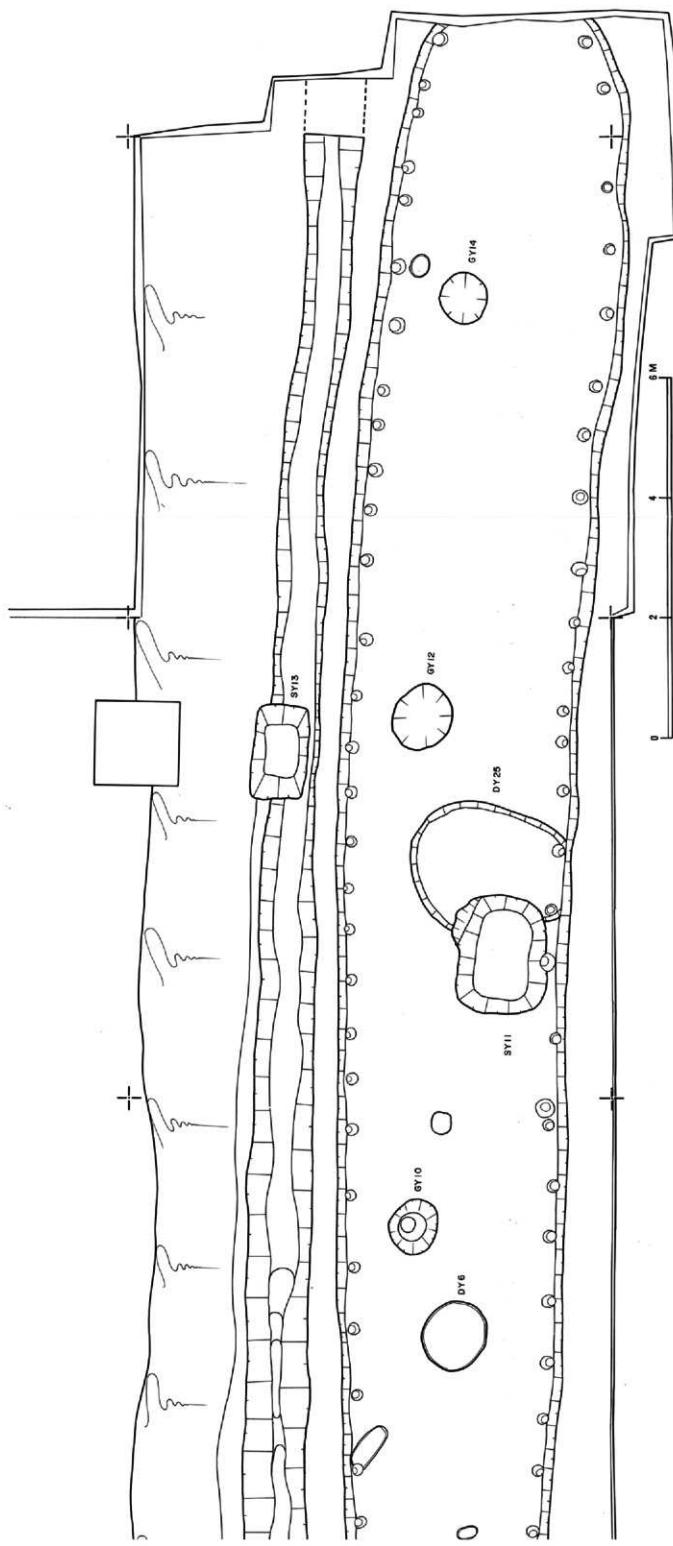
既に述べている様に遺物の大半は大型竪穴住居跡からの検出であり、土器片や小さな剥片を含めれば少なくとも100万点以上に達するものとみられる。器種の明確な石器の大半は一通りの分類は終了したが、剥片（水洗いで検出された遺物）等の遺物は約半分が未整理であることもあって全体的な数量の把握は困難である。従って、平成2年3月段階の主な遺物について述べることにする。まず石器群であるが石鏃228点以上、石錐156点以上、石匙122点以上（その他に石匙の未完成と考えられる石器50点）、石箇状石器10点、スクレーパー類22点、両尖匕首7点、石鉗4点、尖頭状石器200点以上（両尖匕首、石鉗、石槍と推測される未完成石器を含む）、打製石斧1点、磨製石斧4点、石核13点、ビーズ状有孔石製品10点、块状耳飾5点が今まで確認されており、その他に礫器として凹石166点、磨石350点、石皿11点、研磨痕を有する礫器15点、敲石4点がある。

これらの石器群で特に注目される石器としては両尖匕首と石鉗、それにビーズ状の有孔石製品がある。先の両尖匕首は東北、北海道を中心分布する石器群で縄文前期の終り頃に出現するにさえてきたが、今回の一ノ坂遺跡の発掘で同じ前期でも既に初頭の時期には存在することが明らかとなった。石鉗も同様なことが言えそうで、特に共通した成果としては両尖匕首、石鉗、石匙の石器群には製作途上や失敗品、断念品が数多く存在し、接合資料からこれらの石器の製作過程が容易に推測されるのである。ビーズ状の有孔石製品は最小で3mm位のものであり、これまでの発掘例としても前期初頭では類例は少ない。

次に土器群であるが、完形一括土器として30個体分が検出されている。器形は深鉢形が多く文



第17図 一ノ坂遺跡大型竪穴住居跡(HY1)平面図



様はループ文を主体に羽状繩文、結束羽状繩文、斜繩文に竹管文、突刺文、沈線文、八状文を施文したものが多い。これらの土器群は米沢市内では関根地区的松原遺跡、南原地区の大槻遺跡、万世地区的法将寺遺跡、小野川地区的源八前遺跡等が知られているが、全体的には松原遺跡出土の土器群に近い文様構成を示すものであり、関東地方の関山式・二ツ木式に類似するものと言える。最後にA区・B区を中心に検出された炭化物であるが、分析を行なっていないので明確にできないが、圧倒的にクルミ類が多い様である。

第II次調査の遺物としてはAトレンチとCトレンチから石匙1点と剝片20点、土器片2点を検出している。

## V 要約

これまで一ノ坂遺跡の第I次調査と第II次調査の概要を述べてきたが、II次調査に関しては検出された遺構が風倒木塙のみであったこともあって割愛し第I次調査を中心に説明を加えた。今回の調査はI次・II次調査を含めて極小範囲であり、遺跡全体の集落を把握するのは困難であるが、偶然にも大型竪穴住居跡を発見したことは重要な意味をもつこととなった。同様な大型住居跡は東北地方を中心とした東日本文化圏に分布しており、最古の例としては縄文早期に出現するらしく（青森県中野平遺跡）、縄文前期、同中期、後期、晚期と各縄文期を通して存在すると言われている。ただし縄文時代でも早期～中期前半は横円形及び長方形プランを示すに対し、後期・晚期（中期後半を含む）は円形の大型住居跡の場合が多く、各時期、地域的にも変化がみられる様である。またこう言った大型住居跡からは遺物の出土する割合が少ないと従来の竪穴住居跡と共存することから一般の住居跡と区別した施設と考えられてきた。

その主なものとしては「集会所・公民館説」、「共同作業場説」、雪国に多いことから「冬場の共同作業小屋説」、「食料貯蔵説」、「祭祀遺構説」などである。しかし、今回の一ノ坂遺跡からは多量の遺物が出土し、住居跡の西側半分（A・B区）からは土器群と炭化物、住居跡の東側にかけては主に石器群と言った具合に大型住居跡がある程度の機能目的に応じて区画されていた可能性もある。もっと言及すれば西側部は居住生活空間と東は石器を主とした製作箇所、つまり作業空間とを明確に区分する両面を共存していたものとも推測することもできよう。

しかも石器群の多くは失敗品、製作途上品、製作断念品とそれに100万点を越す剝片であり、床面と貼り床内部、床面を8cm～15cm程に掘り凹めた浅い小ピット内に埋納した状況で検出された。この様な行為は全国的に認められるもので、米沢盆地内でみると川西町千松寺遺跡（縄文早期中葉）、米沢市柿の木遺跡（縄文早期中葉）、高畠町日向遺跡（縄文草創期）等からも検出されており、注目される事例であろう。

## 〈参考文献〉

- 秦 昭繁 他 (1977)「松原遺跡」 置賜考古学会
- 加藤 稔・藤田 宿宣 (1986)「天神森古墳発掘調査報告書」 川西町教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信・村山正市 (1986)「上浅川」 米沢市埋蔵文化財報告書第15集  
米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1987)「大浦」 米沢市埋蔵文化財報告書第18集  
米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1987)「宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書」  
米沢埋蔵文化財調査報告書第19集 米沢市教育委員会

# 写 真 図 版



第一回版 實須塚古墳の発掘(一)



▲ A トレンチ全景



▲ A トレンチの周溝完掘状況



▲B トレンチ発掘状況



▲C トレンチ発掘状況



▲F トレンチ内の周溝



▲G トレンチ完掘状況

第四圖版  
大浦C遺跡の発掘

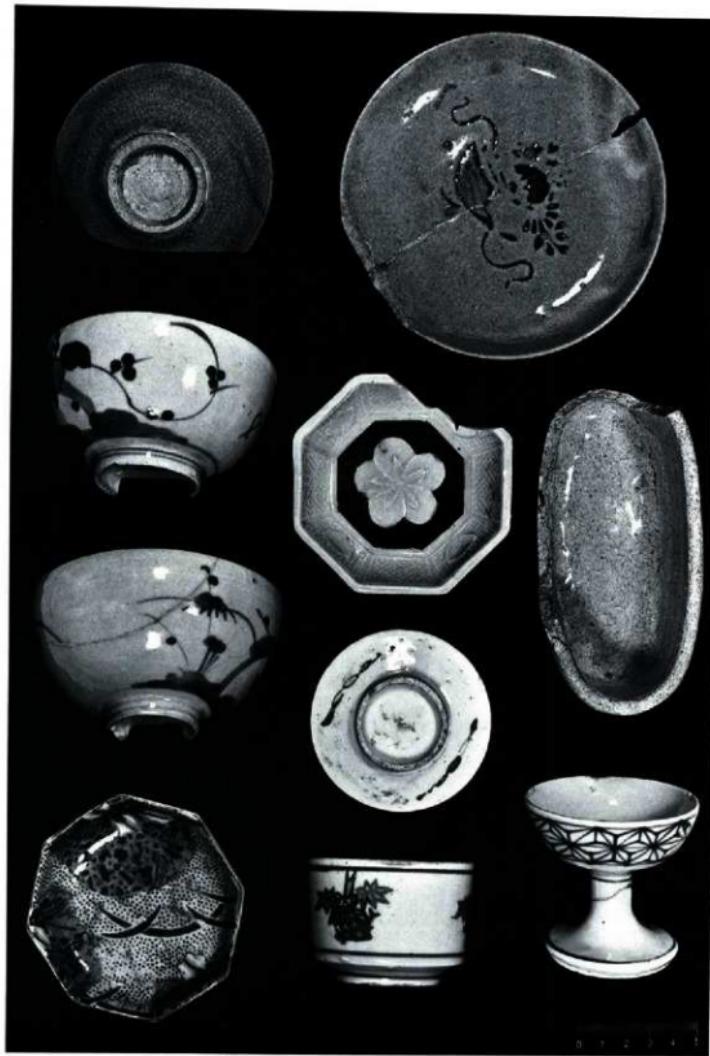


▲大浦C遺跡B区遺構全景(南方より望む)



▲大浦C遺跡B・C区遺構全景(東方より望む)

第五図版 大浦C遺跡出土の陶磁器



0 1 2 3 4 5



▲大型堅穴住居跡全景(第Ⅰ次調査)

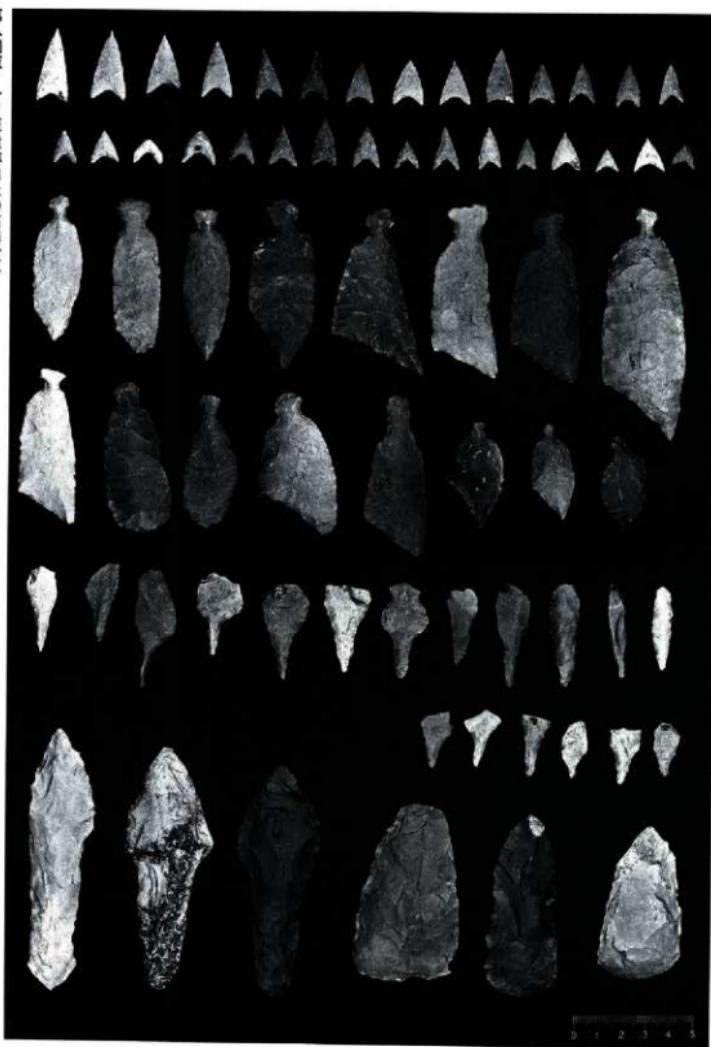


▲C トレンチ発掘状況(第Ⅱ次調査)

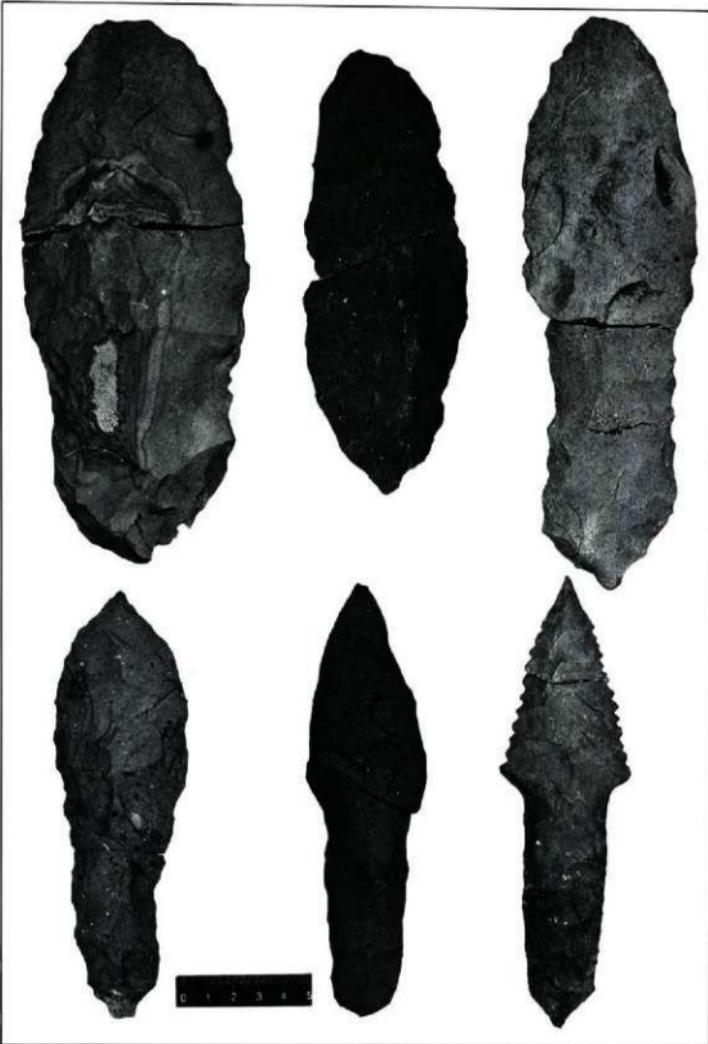
第七圖版 一ノ坂遺跡出土の土器



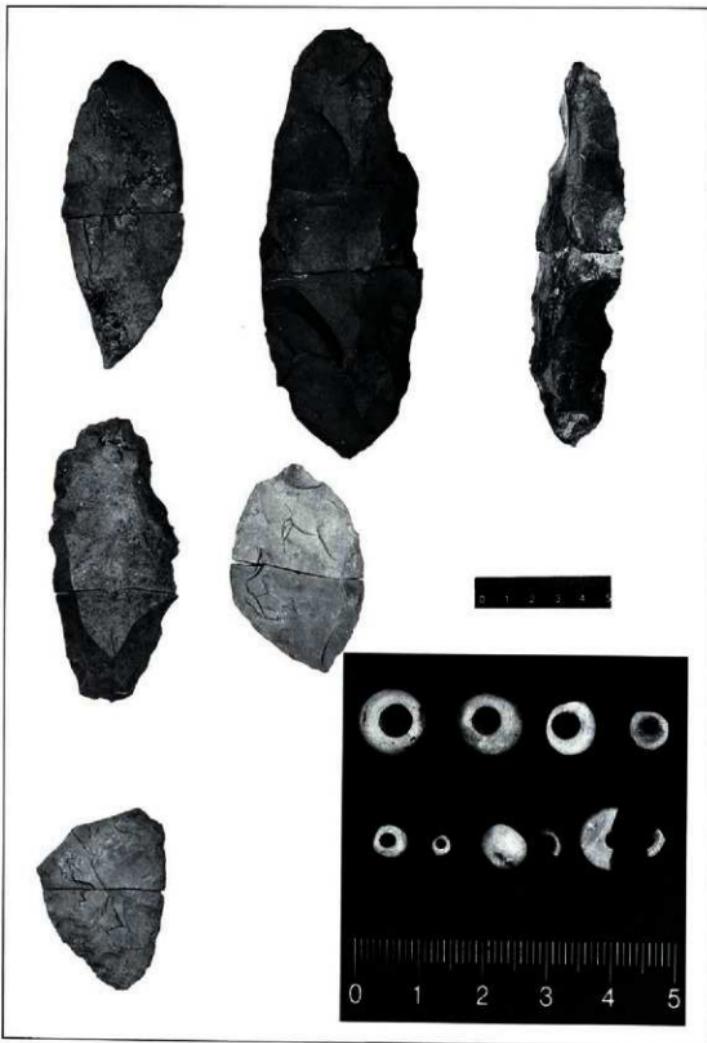
第八図版  
一ノ坂遺跡出土の石器(一)



第九圖版  
一ノ坂遺跡出土の石器(二)



第十図版  
一ノ坂遺跡出土の石石器(三)



—米沢市埋蔵文化財報告書第27集—

**遺跡詳細分布調査報告書  
第3集**

平成2年3月20日 印刷  
平成2年3月30日 発行

発行 〒992 米沢市金池五丁目2-25  
米沢市教育委員会  
社会教育課  
TEL (0238)22-5111  
(内線713)

印刷 永井印刷株式会社  
〒992 米沢市下花沢1丁目2-16  
TEL (0238)23-0693